

令和5年度 江戸川区立船堀小学校 学校関係者評価 最終評価報告書

学校教育目標	よく考えすすんで学ぶ子 思いやりがある心豊かな子 さいごまでやりぬく子 たくましくじょうぶな子	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	子供が学びを通し、互いにかかわり合いながら思いを伝え合う学校 子供、保護者、地域の思いに寄り添った導きのできる学校 教職員同士が互いの思いを伝え合い、新たな教育の創造ができる学校
前年度までの学校経営上の成果と課題	<成果>全国学力調査において、国や都の正答率を大きく上回る結果となるなど、習得型の学力を身につけることができた。授業改善に向けた研究授業を年間8回実施し、「主体的、対話的で深い学び」の視点による授業改善を、全校を挙げて日常的に実施した。コロナ禍後における教育活動について、内容を精査、改善しながら、平常時の形に1つずつ戻して進めることができた。 <課題>基礎的な学力や落ち着いた学習に向かう姿勢を生かして、自ら課題を見つけ主体的に解決しようとする意識がやや希薄であり、それを実現させるための授業改善が課題である。体力テストの結果で、国や都の平均を下回るものがあった。運動遊びの日常化や、体育科の学習の改善が課題である。		

教育委員会重点課題	<取組項目>・評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価		学校関係者評価		年度末に向けた改善策	
				取組	成果	成果と課題	評価		コメント
学力の向上	<学力の向上> ・主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進。 ・学習の基盤となる基礎・基本の確実な習得。 ・家庭学習の習慣化。 ・組織的な対応による取組の実施と充実。	①主体的、協働的に学習に取り組む態度の育成。 ②放課後補習事業(週1回、2～6年)の活用。 ③校内研究を年間8回実施し、「主体的・協働的な学び」をつくる授業改善に組織的に取り組む。 ④ICT機器の活用による授業改善。 ⑤家庭学習の充実。	①東京ベーシックドリル診断テストにおいて、低学年で正答率85%以上、高学年で75%以上を達成する。加えてCD層の削減を図る。 ②児童意識調査「友達と考えと自分の考えを比べて自分の考えを深めている」の肯定率85%。「自分からすすんで学習している」の肯定率90%。 ③ICT機器の授業と家庭学習での活用率向上。 ④全国学力・学習状況調査において正答率を国、都平均を上回ること。	A	A	①診断テスト9月の結果、低学年で83%、高学年で76%と高学年は目標を達成。②児童意識調査の結果、肯定率87%と91%。③ICT機器の授業と家庭学習での活用率は、体育科の研究との関連、水曜日のベーシックドリルデーなどで向上。④全国学力・学習状況調査の正答率が国語で5ポイント、算数で9ポイント国の結果を上回った。都と比べると国語で4ポイント、算数で4ポイント上回った。	A	・学力調査の結果が、国や都の平均を上回るなど良好であることが素晴らしい。日頃からの教職員の指導の成果と考える。この状態を今後も維持できるように努力を重ねていただきたい。 ・ICT機器の活用については、より効果的な活用方法を見つけ、積極的に取り入れていくよう求める。 ・主体的に学ぶ児童の育成は、今後も課題として取り組んでほしい。	・東京ベーシックドリル診断テストにおいて、2月実施時点の結果が目標を達成するように、現状ICT機器のみでの取組となっている課題配信について、紙でも出すようにするなど、C層の児童の取組状況に応じて個に対応できるようにしていく。 ・全国学力・学習状況調査においてA層の児童のさらなる正答率上昇のため、初見の新聞記事を読んで感想をもつ力を付ける取組を5年生以上の高学年で実施するなど、無回答率を減少させるとともに、活字に触れて考えをまとめるアウトプット経験を多くもてるようにする。
	<読書科の更なる充実> ・読書を通じた探究的な学習の実施・充実。	①朝読書(15分)+1単位時間(45分)により年間35時間の授業時数を実施する。 ②読書科、図書館活用に関わる研修会、授業公開の実施により、指導法の理解を深める。 ③読書科ノートを活用した授業実践を積み重ね、学校公開時に保護者、地域に授業を公開する。(年間で学年1回) ④学校図書館及び区内図書館資料を活用した探究的な学習を年間通して計画的に実施する。	①児童意識調査の全ての項目で、数値向上を図る。「本を使って疑問を調べている」80%。「目的に応じて本を読むとしている」80%。「調べたことをまとめたり、伝えようとしていたり」80%。 ②読書活動12時間の内の8時間以上を含め、各教科と関連させた探究的な学習を学期に1回以上実施する。	①児童意識調査の全ての項目で、数値向上を図る。「本を使って疑問を調べている」80%。「目的に応じて本を読むとしている」80%。「調べたことをまとめたり、伝えようとしていたり」80%。 ②読書活動12時間の内の8時間以上を含め、各教科と関連させた探究的な学習を学期に1回以上実施する。	B	A	授業時数の確保、地域への授業公開、学校図書館資料の充実を図れた。各学年、教科横断型の探求的な学習をすすめる、成果物を作成できた。数値目標である児童意識調査の項目は、①「本を使って疑問を調べている」75.6%②「目的に応じて本を読むとしている」87.7%③「調べたことをまとめたり、伝えようとしていたり」81.3%と他と比べて①のみ目標値に達しなかった。特に、高学年に比べて低学年での数値が低いのは、1年生が未履修の段階のためだと考える。	A	・学校公開等で読書科の授業を参観する機会があり、活字に触れながら探究的な学習をすすめるためのツールとして本を活用するという狙いがよく理解できた。今後も継続し、読み解力の向上にもつなげてもらいたい。
体力の向上	<運動意欲や基礎体力の向上> ・校内研究を軸に、体育科の授業改善を行う。 ・児童の体力向上を図る。	①各学年週1回、朝の時間を活用した運動遊び「船スポタイム」を実施し、すすんで運動遊びに親しめる児童を育成する。加えてなわ跳び週間、持久走大会等に取り組み運動機会を確保する。  ②各種運動領域の特性に応じた「楽しい体育」の授業を行い、3つの資質・能力のバランスが取れた学力を体育科学習を通して身に付ける。	①児童意識調査「休み時間にすすんで運動遊びをしている」肯定的回答率85%の数値向上。  ②全学年で、体力テスト(6月実施)における体力合計点が、全国平均以上達成を目指す。	B	B	①船スポタイムの実施から、運動の機会は増え、児童が遊ぶ運動遊びの種類も増えてきている。児童意識調査「休み時間にすすんで運動遊びをしている」肯定的回答は低学年は87%高学年73% ②校内研究を通して、教師の授業感が変化してきていること、また朝の運動遊びや行間体育の実施から、運動や体育学習にすすんで取り組んでいくようになった。しかし、今回の体力結果では達成ができていなかった。	B	・休み時間の様子を外から見ると元氣よく遊んでいる姿が見受けられる。体力テストの結果をみると区平均を下回っているのが残念。これからの継続した取り組みの中で数値的な向上があることを大いに期待している。 ・朝の始業前の運動遊びには教科学習への効果も期待できるのではないか。昔は地域で子供が群れをなして工夫しながら自分たちで楽しむことが当たり前であった。船スポタイムを通してそうした子供たちの姿に近づけるとよい。	①引き続き船スポタイムを実施していく。また、児童がより主体的に船スポタイムを進められるようにしていく。 ②来年度の結果に反映されるよう引き続き実施していくが、得点だけに限らず、体力のところを見ていくよう、教員で評価について考えていく。
	<特別支援教育の推進> ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の実施と充実。 ・エンカレッジルームの活用促進。 ・副籍交流及び共同学習の実施と充実。	①個に応じた指導の充実を図るため、各学年、特別支援教育コーディネーター、専門員、SC等が連携し、特別支援委員会を定期開催する。 ②エンカレッジルームを適切に運用する。 ③ユニバーサルデザインの授業実践を推進する。 ④学年、教科の実態に応じ、積極的に交流学習を推進する。 ⑤特別支援学級において通常学級担任が研修を行い、特別支援学級在籍児童の理解を深め、指導力向上につなげる。	①児童意識調査「友達と仲良くなかろうとしている」肯定的回答95%の向上。 ②巡回指導学級児童の満足度調査90%以上。 ③定期的な特別支援委員会の開催と情報共有を行う。	①児童意識調査「友達と仲良くなかろうとしている」肯定的回答95%の向上。 ②巡回指導学級児童の満足度調査90%以上。 ③定期的な特別支援委員会の開催と情報共有を行う。	A	B	・特別支援委員会を定期的に開催している。一人一人の児童に対して支援内容を考えた話し合いが不足している。低中高に1人ずつにコーディネーターがいると連携がとりやすい。児童意識調査「友達と仲良くなかろうとしている」低学年の肯定的回答97%。高学年94%。 ・エンカレッジルームは主に不登校児童が学習等で活用している。 ・1、2年生は生活科のおもちゃ作りや学校探検、3、4年は総合的な学習の時間の発表、5、6年生お別れスポーツ大会で交流を図っている。 ・通常学級とあすなろ学級相互間で給食や授業の交流をして理解を深めている。	A	・不登校の子供が全国的に増加傾向にある中、本校も例外ではないことを理解している。そうした中、子供の居場所を作る取り組みは評価できる。これからも個々の子どもの状況に応じた支援をできる限り続けていきたい。 ・特別支援学級の子供と通常学級の子供が互いに学ぶものがある交流をさらに進めていただきたい。共生社会を目指すうえで非常に重要である。
子どもたちの健全育成	<子どもたちの健全育成に向けた取組> ・不登校対策の実施・充実。 ・教育相談の強化。 ・hyper-QUの活用。	①hyperQ-Uテストを実施し、各学級の児童の意識を明確に把握して、児童理解に結び付ける。中でも要支援群に位置する児童への個別の対応を充実させる。 ②ふれあい月間における児童アンケートの実施と活用、対象児童への早期対応。 ③いじめの状態に応じた、いじめ校内委員会の開催。 ④SSW、外部関連機関と連携し、不登校対策委員会の定期開催。	①いじめ問題の早期発見を行い、解決率を100%とする。 ②不登校状況の具体的な改善。(登校日数の増加、面談機会の増加、放課後登校の増加等)	A	B	①いじめ解決は3か月たないといふ数値の上では0にならないが、継続して指導を続けている。hyperQ-Uテストの結果を児童理解に活かしたり、面談で保護者に伝えたりしている。 ②アンケート結果から児童への聞き取りをしているが、日々の様子から、いじめや問題行動を未然に防いでいく。 ③各学年、管理職、関係職員でいじめ校内委員会を開催している。 ④各学年、管理職、関係職員で定期的に開催している。エンカレッジルームがあることで数名の児童が別室登校している。面談は担任やSSWで連携を図って行っている。	A	・いじめの重大案件になる前に、対応して問題解決に当たっている点が評価できる。いじめが全くないということも、逆にその認知に向けたセンサーが機能していないものと考えられる。 ・これからのいじめの初期対応をしっかりと行い、問題解決にあたってもらいたい。 ・エンカレッジルームがやや殺風景。子供の心をリラックスさせるような環境整備を進めていただきたい。	・hyperQ-Uテストやアンケートの結果を児童理解に活かしていく。面談等で、保護者に伝え家庭と密に連携できるようにする。普段の学習指導や生活指導に生かしていく。 ・エンカレッジルームの活用方法について検討し、不登校傾向にある児童に安心できる居場所を提供していく。
	<自校(園)の取組の積極的な発信> ・学校ホームページの充実。 ・学校公開の実施と充実。	①学校配布文書のデータ配信及び各種アンケート調査のインターネットアンケートの実施。 ②学校の教育活動の様子をホームページ上で具体的に配信する。 ③保護者の人数制限を解除した学校公開、学校行事の開催。	①アンケート回答率80%以上。 ②学校の教育活動の週1回以上の更新。 ③保護者参観率90%以上。	①アンケート回答率80%以上。 ②学校の教育活動の週1回以上の更新。 ③保護者参観率90%以上。	B	B	①回答率は65%にとどまった。さらなる周知と意識付けが必要。 ②ホームページ上で配信している。 ③学校公開、学校行事の参観は90%を超えた。	B	・学校ホームページは更新頻度が少ない担当もありやや残念な部分もあった。 ・保護者への電子データによる手紙等の配信は時代のニーズにマッチしている。
地域に広く開かれた学校(園)の実現	<学校関係者評価の充実> ・教育活動の改善と充実に向けた学校関係者評価の実施。	①年間3回の学校評価委員会の開催。	①年間3回の学校評価委員会の開催。	A	A	学校公開や学校行事の開催と合わせて学校評価委員会を3回開催した。 評議員の方々の貴重な意見が参考になった。	A	・年間3回の評議員会を通し、学校経営の状況がよく把握できた。また、年度当初の経営方針の内容が具体的によい。担当の先生方が説明を行うことは素晴らしい。	引き続き学校の教育活動の公開と定期的な評価委員会の開催を行い、地域に開かれた学校の実現を目指す。
	「学校における働き方改革プラン」に基づく取組の実施	①SSS及び学年アシスタントの導入と効果的な活用。 ②一斉定時退勤日(年間11回)、年休取得促進日(年間3回)の実施。 ③ペーパーレス化の推進。	①月あたりの時間外勤務45時間以内の全員達成。 ②ストレスチェック結果におけるストレス状態の減少。(前年度比) ③ペーパーレス化の推進。	A	A	①SSS及び学年アシスタントの活用により時間外勤務45時間以内を達成。②総合健康リスクの結果91(全国平均を100とする)③学校からの連絡をデータ配信に変更し経費削減につながった。	A	・データから見ても明らかに教員の時間外勤務時数が大幅に減少している。大きな成果。 ・教員が本来行うべき内容についてはしっかりと取り組んでもらいたい。	・働き方改革を進めるために、SSS及び学年アシスタントに引き続き支援を求めていく。 ・行事の精選など、教師の業務を整理し定時退勤や休暇が取得できるように業務を整理していく必要がある。 ・データ配信を活用していく。
特色ある教育の展開	<ボランティアマインドの育成> ・船堀小ガーデンの維持運営。	①船堀街道沿いに「船堀小ガーデン」を造成し、全校児童と保護者ボランティアが協力して花壇の世話することを通して、自然を愛する心、ボランティアマインドの育成につなげる。	①船堀小ガーデンの取り組みに100%の児童が積極的に参加する。	B	B	①ガーデンは各学年で分担して世話をしている。100パーセントの児童が活用するまでには至っていない。	B	・作ったものを維持していくのは難しい部分もある。人・もの・金の観点からどのように維持運営していくかを計画立てるとよい。地域の方々の注目を浴びている。	・ボランティアと連携したり、児童相互間で進んで植物を育てたりして船堀小ガーデンを活用していく。